九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

天理大学附属天理図書館蔵 大隈言道『続草径集』翻刻と解題(三)

進藤, 康子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/25265

出版情報：文獻探究. 48, pp.33-46, 2010-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

天理大学附属天理図書館蔵

大隈言道『続草径集』翻刻と解題（三）

進藤康子

657 すゝしやといつにかはらす夏こたちそよきはしむる木ゝのけしきは

658 かへるての若はてりすく光にはこゝをはよそに行かけそなき

659 いつかたのそらまて行て子規をしみのこしのこゑはなくらむ

660 ゆく川のみつもてあそふ図師のさと夏の程たに住居てしかな

661 ゆきかひにむかしいこひし道のへの木の根は今もかくてありけり

662 行かたきこすゑを行て蝸牛いとむつかしきみちこのみかな

663 わかのきのわかはめてたきわかたけにそひても升る夕烟哉

664 わかいほりはなれかてたる夕烟軒はをよそに吹風もなし

665 たゝこゑのくらかり山の子規なはかりきくはこのところかも

666 たゝ一ひらきはなちて花ひらのいまたいちとせふゝむ白菊

667 あさとこにわかみ吹るゝこゝちよみねたらぬ床を起るねやとこ

668 山吹の花のさかりになりにけり行水細きゐでの玉川

669 うちむるゝ蝶のあそひになの花も粧立てましるのへ哉

（28・ウ）「

670 六月の日にさへかれすなてしこの花のすかたにはをさなけにして

671 ○ 夏のよのねよとのかねのこゑのゝちさひしくならむ時そすゝしき

672 暁のかはたれ時にすゝみしてかへるさにきくせみの初こゑ

673 たなはたのまとゐの人は皆うせてとものほしけきあけかたの空
674 しはしたにとまるとなしに過々てさとなれましや山ほとゝきす
675 はつこゑを早くくきなかは子規またのこりたる山ふきのはな
676 花もなく人も見るとていかにともせられぬものははるのくれかた
677 さよふかみありしほたるはあともなくくらきにそよく岸のわかこも
678 大カタノ世の外かほにゆきかひてそらにのみなくほとゝきすかな
679 うみとほく波路を行て子規そよとひかへる山ほとゝきす
680 ほとゝきす立やかへるとおのれからくもまをあけてとほすなる哉

（29・オ）

681 たかきねはまたゝかきねもありぬへしふしにたかねにこし山そ無
682 みとせへてさくといふなる桃の花われそれ迄のいのちともかな
683 おもしろくなかるゝ水にけしき合ておのれも立る水きはの松
684 とかくして所々に過ぬへしのこるあつさも今の間なれは
685 ぬひさしの衣ともいはす親子ねこともすれはぬる心なさ哉
686 このみたに一もちても旅人のなかれ楽しむ川くまのやと
687 かたみにやものめつらしく見えなまし五月雨はるゝをちこちの郷
688 をとめひてさけるものから六月の月にもしをれぬなてしこのはな
689 蝶のこと戯るへくにおもへとも花にゝけなき身のおもさ哉
690 くれたけの子はいつこにか生いてむおのかありかをおのれしるのみ
691 こしより庭のかきねに生いてゝ野となすものはわらひ也けり
692 土筆つゆたに含むけしきなく何をかくとも見えぬ筆かな

（29・ウ）

693 軒たかく竹にのほりて蝸牛そこやひるねのゆめの中やと
694 庭へみな夏くさとのみなりにけり末のみ身ゆる垣のしをりと
695 谷水のいはまをもるゝおとさけはくらきよはにも見まほしけなる

696 われもしか戯てありとおもへとも花になるゝはてふそしりけり

697 誰か寝ていほにありともいひかほに雨よこさまにうつ雨あらし哉

698 朝たちて旅行人のめにたにもおひおとろかすつく／／しかな

699 おしなへてうたておいけり春の野のそのたけ立るおなしさわらひ

700 なてしこのなてぬはかりのすかたにもいたはしけさそ花はまされる

701 独言いひのみいひて　見るわれを花にゆつりて見るよしもかな

702 いつはりをいふにたかはぬわか身哉なとか入こしさとの大門

703 山さともおなしうき世の中なれと市にはかはるところなりけり

704 まつこゝろなにことゝなくさはなるを一になせるほとゝきすかな

（30・オ）

705 またるゝやうれしかるらむゆく／／もなきそはへたる子規かな

706 人しれすくれ行春もをしむ人なき世のさまにつれて也けり

707 うるはしき花のいろにしくらふれは七のたからもよそにしつへし

708 そらとほくきこえきこえぬ子規いかなるくもの立へたつらむ

709 いつるひのかけうちむきてしをるゝも心からなる朝かほのはな

710 時のまに一二もなかりけりならひて落るのきの玉水

711 はるきぬとまつ立わたす大路すら山さとふりに雪はつみけり

712 うれしけに旅立そむるこゝろにもまたましりくるうさはありけり

713 乱行するをもしらてゆたかなる世に生れしとおもひつるかな

714 月見れはすゝしかりけり風のこと身にはふかねとそてをてらせは

715 ぬつゝみるわか身はよきてもみちはをちりしかしむる庭の小筵

716 花さけはわれかしこけになくとりのこゝろ／／をしるよしもかな

717 月も日も早く過るをしるものはしはしもあらぬさくらなりけり

（30・ウ）

718 たくらへてもとのありかをおもふには今のいへさへすてうかりけり

719 わかやとは常にかはらぬこのもとににはくつろけるはる風そふく

720 さと人のはしたてかくるさくらはな折見たるやと見るそくやしき

721 もゝのはなちりうくおのか杯をまたうかへても見るかはせかな

722 わかやとをとふよはなくて子規よそに過るは得ものなりけり

723 ひとこゑを鳴しきほひに子規行方かへぬくものはたてに

724 おとなしになかるゝ水もともすれはいはうちこゆる水のしらなみ

725 なかきひをみちの長手にしりつらむこまもろともにねふるこま引

726 あとよりもくる人みよと手をかけてをらて過ぬるなてしこの花

727 花うりのいかにたわめて折つらむ一日にかれぬさしゝしらきく

728 さま／＼の花うりありく花うりにならまほしくて見たる花かこ

729 花車とゝろきくれはとゝろきてまついてゝ見るいちのなみ門

730 水あさく清くなかるゝかたしりてこなたになひくかはらなてしこ

731 をとめらも花をりもてはおのつからさわかしからすなるすかたかな

（31・オ）

732 土のうちにわひしかりしをもえいてゝこゝろはるへにもゆるさわらひ

733 中々にいそきかねたる六月のこの道中にものかけもかな

734 水たにもかけをなかれてこのもとのみちきよかれとしける山松

735 垣こえてまちかくきぬる日かけさへしらぬかほなるあさかほのはな

736 人ふみてかれかほしたるかつらにも一二さける朝かほのはな

737 あさな／＼うちいてゝみるあしやかによるなみことになにかよすると

738 朝かほのもろきかつらにうれしくも花にきあへすゆく日かけ哉

739 はかくれもかくれはてねは朝かほのともにしほめる朝日かけ哉

740 おいぬれはいかて心のかはるらむ楽しきことのなへてくやしき

741 とも角も独そゐへきさひしさはすゝしさとこそ一なりけれ

742 いつれともとりかくへくはあらすしてすゝりのふてのおほき世の中

743 朝毎に吹もいつれと朝顔もほそけになれるかれかたのはな

744 枝たれて松おもしろく覆へれはかけゆたかにもゆくしみつ哉

745 雪きえてそらはのとかになりぬるをえしらぬ土の下わらひ哉

（31・ウ）

746 こゑたてゝすまの松風まふからに見れはこほるゝそてのしらつゆ

747 さと人の臼するおとにこき雑てさとのをとめかうつ砧かな

748 のほれとも身を引もとすこゝちしていそへの山のまさこなりけり

749 いけにいてゝおとなくなれる山水のさわかしけさもさわかしけるも

750 ぬけいてゝそら仰たる花すゝき野分やふくと見たるはかりに

751 ねてやあるおきてやあると人や見むものおともせぬまとの灯

752 なか／＼しはるの一日はのへの道かすみ／＼てすゑも無まて

753 あるものをつかひはてたるはつはるにあまりおほきは寒さ也けり

754 落てきて麦生をはしる夕ひはりねくらはあらぬ所也けり

755 いつれともわきてはつましあさち原みるかたことにわらひ生れは

756 つらき世をとくすてはやとおもふ身はもちにかゝれるとりの身そかし

757 うめの花□にぬふへき□□のしわさも見えすふれるしらゆき

（32・オ）

758 山さくらかすみのうちになり乍さかてあるかもわかぬはなかな

759 立ならふ松になかるゝはるかすみよくみよとてのこゝろそみる

760 けさ見れはをかへのわかな色かえてつまぬさきにも雨そあらへる

761 あさよひにかすみまねふて立烟人のしわさにあらぬ斗に

762 かたへよりちるこゝろもやうつりきてとまる木もなく花の成らん

763 ちるこゝろうつりきぬらしかたへよりちらぬ木もなくなるさくら哉

764 かゝくれはまことさやけき桜はなすたれこしにもめてし一木を

765 ○すゝしさもいふよしなしや村さめは初秋のそらにふらすへき哉
766 ○老らくのこしをれすゝきさ乍も仰て見たる初秋のそら
767 風吹は　程につけたる　細竹の　汀によする　いそのさゝなみ
768 ゆめのことすくる時雨のやすけきに一葉おちすは　いかてもみちと
769 ともすれはとなりに行てわかゝたをかいまみしたる朝かほのはな
770 市のこと　あたりまとへる　こともなく　行やすけなる　野への細道

（32・ウ）

771 ありき見るわかめのまへて枝たれてをられはやとて花の枝哉
772 わかはこそもえましものを櫪原こそのこ道を猶をしみけり
773 おもしろくなかるゝ水をさかたてゝうこかすものは秋の山風
774 かすみ立そらうれしけにまふひはりおのと斗は誰かあらまし
775 世中ははしめ驚くことたにもはたわらふへくなりにける哉
776 くものゐのたわみたわひし糸にさへそのことくおくのへの白雪
777 やすかりし御世にやくひてことさらに俄に物のむつかしき哉
778 水も木もおとする物を独居てこゑなきものはわかみ也けり
779 みちのへのこやの主にわれならむ朝夕ことに山川を見て
780 はるかにものそめはとほきうみ山のわかあしもとに畫る身そうき
781 わかみとて外ならんやはは秋に老やすけなるくさ木をそ見る
782 やとちかくなかるゝ水のやすけくてさらぬ此世をしるくみすらむ

（33・オ）

783 いさゝかは水なきまてにあさひてももとのこゝろになかれぬるかな
784 あさひてしそこひは清し川そこのさゝれのかすもよむまて
785 なにのつねゆくかと見れはみなとよりまともに上るにし川の舟
786 水みれはみちたる□のかけをさへ半にしたるいそきはの月
787 はしのうへに行違たる人の影水にも見ゆる月のよはかな

788 なにことをさもこゝろえて花すゝきうちうなつける秋の夕くれ

789 ○あらぬ鳥ちかつく空を子規そよ待えつといはれけるかな

790 ○われをおきて外にはあらぬ身軽さにまたまさりぬる枝の鶯

791 鶯の移ふみれは中垣のそなたこなたもなきとなりかな

792 こなたへとちかつく見れは子規おのれも我に尋あひけり

793 きのふまて青になしみし冬の風ゆたけしものとなれる春哉

794 とに角に枝すくなしと見る花を折らせよといふ人こゝろ哉

（33・ウ）

795 あさかすみ立へたてたるをかこえにありかをかふるきしのこゑかな

796 ゆくかたに花もさかめとこゝにても見せまくほしきかへる雁かね

797 よとふねにおくれ先立子規ともに却に上るとりかも

798 みやこへに花のさかりになりぬらむきそひて上るよとの川船

799 月みれはわかさかつきにうつれともともにたかはぬすかたならすや

800 子規なく一こゑにくらかりしいほの灯あかくなるらむ

801 こゝにして見れはなにはの三のはしいこまの山のまへにわたせる

802 夕くれの山のは見れは出ぬへき程にもあらぬ月そこひしき

803 むかしへにかはらしと見る月影われから違ふ今の世そかし

804 あからひて青葉も見ゆる夕日影見るまにくらきたそかれの空

805 をりとりし枝のかをりやあらむとはいよ／／かいまさりけり

806 折とらて梢のまゝにおかれけり一枝も多くうめかをれとて

（34・オ）

807 谷水にともなひなれていつも／／山をいて行とちとこそおもへ

808 むらしくれしくれ／／てみのむしの蓑にも雨やぬれ通るらし

809 もりのまにいへ引入よ蝸牛雨あらひて夕くれの空

810 雨にいて日にはかくるゝかたつむり何の心に違ふなるらん

811 こゝろなき雲の行へを見る毎にいつる時無やとそさひしき
812 にきはふもよそよりしるしなはの市灯計りもちよろつにして
813 山のはをやかてのほりて大空にとりはなてりと見ゆる月影
814 さゆり花たゝ一もとのましれはやにはおかまくほしき草村
815 花みれはうす花いろの尊くて必こきか宜しともなし
816 けさ見れは　雲井の春もくれぬらむのへのひはりもそらに上らす
817 ゆたかなる御世になれきて何とかや真の金まことゝもなし
818 やゝたかくなるかとみれはそらの月わかやとさして来るけしき哉
819 ちよろつの火をうち放いくさこそ昔もきかぬよに社在けれ
820 折とれる一枝々々にさくらはなすくなくは□なかけしき哉

（34・ウ）

821 ともすれは井けたにきつるみそさゝき何に驚けしきなるらん
822 水くらきあしへの蛍そなたにみまた夜はあけぬあけかたのそら
823 ありあけの月中そらに在乍入山のはもいまたおもはす
824 はかなしや玉にぬかむと手にとりて誰かはくたくのへの白露
825 いにしへの人のかさりも今なくて露の玉のみしけき故さと
826 一えたのさくらもわきてにほふ哉かはれる花を手折たくへて
827 をちかたの山もとくたる人かけもやかてうせ行夕しくれかな

（35・オ）

828 花の枝人に任て見なからもまかせかてなるわかこゝろかな
829 夏川のみかさまさるにおとろきて人見にいつる五月雨のころ
830 土のうへにしたりやめたる藤の花今や限のさかりならまし
831 ちりはつる庭のさくらのさひしきに陰もるものは山吹のはな
832 うちたるゝきしの山吹折々にしつきしつかぬ井手の川水
833 何事もほの／／しきに子規おのかこゑのみさたかなるかな

834 かと過る人のいふをひそかにきかれけり軒はのうめをいかにめつやと

835 あをうみの沖さへ見えてうらさとのかとよりせとに通る浜風

836 はるしりて二年三年さくらにもこは初事をけふのにほひは

837 山さとのまはらに立る樔垣なくてもよしと見ゆるやとかな

838 かす／／もまた落なくに椎かもとわらはつとへの陰にそありける

839 花のまにむれたるこからくもゐにも身をかけつへき軒の妻哉

840 人しれぬ棘かなかの　落栗の　中々生て　たけ丈にけり

（35・ウ）「

841 いらたちていとはしけなるさま乍まとにとりつく姫いはら哉

842 なほさりにゆへるものから山さとのよにふさはしく見ゆるしは垣

843 山風に吹なやませとさくら花いきとほろしき色なしにして

844 山さとのそともの茅生のかけ立におもひもかけぬ鶏のこゑ

845 山さとの竹の枝垣みやこにもゆはまくほしきあはれなる哉

846 風さむき冬にそむきて大かたは南おもてにすめるうら里

847 砧うつよねつくころもあらひほし港の舟は家にかはらす

848 中々にみせたなありていちかほにならへるやとも見ゆる山さと

849 よち見れは手放かてのさくら花をるもはなつもをしき枝かな

850 あおうみの沖さへ見てうらさとの門よりせとに通る浜風

851 老ぬれは身もとらるへき心地しておそろしくさへおもふ初霜

852 あらちかたうらのまさこのかた／／に大さをわきてよるまさこ哉

（36・オ）「

853 おのつから木立のかけをあさるも餌を得て友に告るにはとり

854 いのちありてきくそかなしき小瀬川の昔に増るいくさかたりは

855 さきいつるかなたこなたのうめかえにこころもさそと見ゆる梅哉

856 大路のみ行はかりにもなかりけりさかしき山もみゆる世の中

857 皆人のめくるを待てうめの花折ほと〳〵に枝もさしけり

858 つとひしてくみかはしつゝ春酒をけふはよはすといふそ酔なる

859 いつのまに独のそらになりつらむ入日をおへる夕月の影

860 われなからかくこそをしけれ花の枝まさるをおきておとるをそをる

861 をりとらはいつれの枝そさくらはな手もさしいてすみたるものから

862 やとちかきのへひろけれは□蔓ところえかほにははぬかたなし

863 そらにありて獣あつめもあちきなくいぬかひ星のうしを引らむ

864 あけぬより羽つくろひもかしましくわかみとゝもにすめるいへ鳩

（36・ウ）

865 車にもむかふかまもてさりけなくいほむしりこそまたをかしけれ

866 みのみこそいかゝしけなれわらはさへてにとりたむるのへのさゝくり

867 垣こゆる事もわすれて一筋に竹の世のほる朝かほのはな

868 君はたゝはかりのおもしもの見れはかけくらへたる事はかりして

869 あさかほは垣こえてのみさきにけりわかゝたきらふ花にそありける

870 中垣のあなたに行てわかみれは主もしらし朝かほのはな

871 あさかほのさきのさかりもしらすして朝な〳〵ぬる朝ゐとち哉

872 あけぬよりはねつくろひのかしましくわかみとゝもにすめる家鳩

873 ほとゝきす一こゑ鳴しあたりよりけしき立たる谷の杉村

874 とかくしておそくいてこしはるのひもあそひ余れる春のゝへかな

875 花みにといたしはてゝは唯独やともる人そいとゝひなかき

876 おつるまて見えにしものを夕雲雀行へもしらすなるちはら哉

877 夕ひはりおちしちハらをきてみれハさひしくたてる土筆かな

（37・オ）

878 中々にはかなく見えてあたものは花にくるしむわかみなりけり

879 わらはへに子をとらるやと夕ひはりとこをよきてもおつるのへ哉

880 くれにきと灯ともす花のまはひるよりけなるところなりけり
881 みなとへのうゑ並さくら舟毎におのか庭とや花をみるらむ
882 ゑかくより見てこそあらまし村雨のあめにぬれたるまとこしの竹
883 川とほく舟くたりきぬ子規おのれも鳴てたくふころかな
884 神なきのしめ縄くゝる子規よそになきてはいてしとおもふに
885 月のかけ舟こくほとはいそかねととく先たちて波にいるらん
886 たな引るくものハたての子規今こそなのるところなりけれ
887 み仏を祭るけふともゆあひしてわれもうまれしこゝちこそすれ
888 かけ見えてこゑもちかつく子規まてハまちたるしるしありけり
889 月入はまた月いつるものかほに山のはさして行子規
890 うれしくもゆひとゝめけり神かきのみしめのうちのあり明の月

（37・ウ）

891 わかたけのうひ／／しくもことし生てまたわか世にも出る程かも
892 子とゝもに落てねましを夕ひはり今更あかるくれかたのそら
893 くれゆけとおつるもみえす夕ひはり雲のうへにや今夜ねたらむ
894 いくはくもさゝぬ軒はのあやめにもおもけにすかる露の白玉
895 さま／／のこたちか中にほこらしくわれいとたかき杉の一本
896 むかし人うへもいひけりこれや此松をいたきて上る月影
897 ほのめける月をさたかになすものは山子規なくめ也けり
898 はしわたる人にもみよと水たにもめくりなかるゝ川骨の花
899 なかゝきをくゝりていつる竹の子のなとわかやとはいとはしけなる
900 めもなくてむかひあひたるはまくりのいつれかおやことしれるかほなる
901 けさみれはところ／／に生いてゝ露の玉まくのへのさわらひ
902 春さめに生さへすれはよしとにやたゝもえにのみもゆる山山

（38・オ）

903 風ふけとしはしはすさすみつるかな月のうちにてうこく竹の葉
904 田よりおつる水の濁をよき／／てすめる川せを升るわかあゆ
905 生まとふまゝに任せて山さとのまかきをゆふはくすかつらかし
906 わかゝたにさしたる月と見え乍山のあなたもてらしぬるかな
907 山たにの水あることにかけすめは月も数なる こゝちこそすれ
908 このもとにおのかともしひもていてゝ花と三人のまとゐをそする
909 ゆきふれは山さとめける市路かなみのかさきてや行かよふへき
910 立いてゝよそより見れは灯は人なきやとのあるしなりけり
911 麦まきてまた生あへぬ山はたをさきにしめたるつく／／し哉
912 ゆきはゝやきえてかあると山はたにかしらいたせるつく／／し哉
913 あさちふはおのかむしろと見るものを人をゐさせぬ立わらひ哉
914 あさちふの野に臥乍見わたせはわらひにましるをちのとほ山
915 あたへたるものはいやさへいはぬかな飼犬ならは尾をもこそふれ

ある人のなめけなるをよめる

916 けふはまたあかききくにやさしかへむきのふのきいろいまたあかねと

（38・ウ）

917 しらきくのつふ／／かさねよろしとてそのはみなからその花にしつ
918 けふよりはのこりの草になりにけりひらきかねたる草も見ゆれと
919 人よりもさるのわさこそあはれなれいかにむちうちをしへたるらむ
920 なにをかもやらむと思へは飼犬のまつ尾をやりて待かうましさ
921 をちかたのきの山までは花と見えすゐは白くも立つゝくらむ
922 見いてたる一二のうめの花いくはなさきてとしをこゆらむ
923 たゝゆきにゆくのみにてはあかしかしすみれもさけるのへの細道
924 こそまては花こそちりてこえにしか枝さへかきの外に出にけり
925 谷わたる人にみよとやたかはしの柱にまとふふちなみのはな

926 さくらはなをりはしめても在ものをよそかほにのみゆくかはせかな
927 わかゝとのまつま久しきむら□まつひとほたにはしりてもかな
928 うちたれて松かけふたく藤のはなよそよりみよと人にたゝせす
929 梅の花こえかたけなる垣こえておのかやとにもなすとなりかな

（39・オ）

930 二枝三枝さかてはにはのうめのはな一枝もえこそをられさりけれ
931 水底の月とりかほの松の枝おのかおとしゝものかほにして
932 月さへもいといとまなるけしき哉されはそおのか友とみにけり
933 そのうめのたゝ一枝をゝるにたに花もなくなるこゝちする哉
934 こゝろありや萩のなかゆくほそかはの行かたしりてやとる月影
935 はるの野のまつひとつなきあさちはらうちもねよとの所也けり
936 川のへに枝さしいつる梅のはな世をわたりてもゆくけしき哉
937 われをしるけしきもなしやなれ／／て日にいくたひかわたる板はし
938 枝をれはちりてうせぬる川のうをのかくれところか山ふきのな
939 こゝろありてあたふはかりにちる花をまちかほもせすいそく川水
940 □人にうち任すれは花の枝一枝とをるはいく枝なるらん
941 はることに花にこゝろをこひれともかひなくちるはさくらなりけり
942 傾けるにしの山もとゝくゝれてとほきをのへにのこる日の影

（39・ウ）

943 かけ清き朝けのほとのさくらはな時過行はさはかりもなし
944 をとめらか手折てもたるさくらはなさらで見そのまゝそよき
945 わかをれは人にも折てさくらはなやるゝくなるか味きなきかな
946 はることのともにはなさしさくらはなわかいふことをしかもきかすは
947 きり／／すそてにやくると灯のもとにかくれてきくよのまかな
948 むらくものひまあることにうれしきはわかゝた見たる月のかけ哉

949 村くもにへたてゝあれとそなたゆく月のすかたは見ゆるよはかな

950 さむしとていとひし故か風たえて払ふともせぬ月のむらくも

951 川水はよそかほにしてなかるれとしひてうかひてゆくさくら哉

952 むらくもをいてくることにいくたひもおとろくはかり清き月影

953 ねやのうちをとひていぬれはきり／＼す跡追かほにきたる月影

954 めつらしく過しゝくれにあり明の涙くむとも見えぬ月哉

955 今こそは いてぬといへは ねやとより 帯ゆひあへす 見たる月影

956 何ことそまた入ことは早しかしひさしかくれにかくれゆく月

957 月のうちになれるをしるや露おきてうちたれきぬる軒の荻のほ

（40・オ）」

註

凡例は、本誌46号参照のこと。

付記

本稿の資料閲覧、および翻刻については、天理大学附属図書館に御許可を賜った。ここに深甚の謝意を表する次第である。

（しんとう　やすこ・本学大学院博士後期課程）